

地理歴史

I 地理歴史科の改訂の趣旨及び要点

1 地理歴史科の改訂の基本的な考え方

(1) 基礎的・基本的な「知識及び技能」の確実な習得

従前の学習指導要領では、それぞれ教えるべき内容に関する記述を中心に、教科等の内容の枠組みごとに身に付けることが目指される知識などが十分に整理されることなく示されているとの指摘があった。今後の学習活動においては「何を理解しているか・何ができるか」にとどまることなく、「理解していること・できることをどう使うか」を意識した指導が求められる。

(2) 「社会的な見方・考え方」を働かせた「思考力、判断力、表現力等」の育成

「社会的な見方・考え方」は、資質・能力の育成全体に関わるものであり、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」であるため、「思考力、判断力、表現力等」の育成に当たって重要な役割を果たすものである。

単元など内容や時間のまとまりを見通した「問い」を設定し、「社会的な見方・考え方」を働かせることで、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする学習を一層充実させることが求められる。

(3) 主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成

選挙権年齢が満20歳以上から満18歳以上に引き下げられたことなども踏まえ、政治に参加する権利を行使する良識ある主権者として、主体的に政治に参加することについての自覚を深めることなど、これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくことが強く求められている。地理歴史科においては、課題の発見、解決のための「思考力、判断力、表現力等」とも相まって、身近な地域社会から地球規模に至るまでの課題の解決の手掛かりを得ることが期待されている。そのような理念に立つ持続可能な開発のための教育（ESD）や主権者教育などについては、地理歴史科の学習において重要な位置を占めており、現実の社会的事象を扱うことのできる地理歴史科ならではの「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」が必要であり、子供たちに平和で民主的な国家及び社会の形成者としての自覚を涵養することが求められる。

2 地理歴史科改訂の要点

(1) 内容の改善・充実

- 地理歴史科の科目構成を見直し、共通必修科目としての「歴史総合」と「地理総合」を設置し、選択履修科目として「日本史探究」、「世界史探究」及び「地理探究」を設置する。
- 「歴史総合」については、以下のような科目とすることが適当である。
 - ・ 世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて、近現代の歴史を理解する科目
 - ・ 歴史の推移や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する科目
 - ・ 歴史の大きな転換に着目し、単元の基軸となる問いを設け、資料を活用しながら、歴史の学び方（「類似・差異」、「因果関係」に着目する等）を習得する科目

- 「歴史総合」を発展的に学習する選択履修科目として「日本史探究」、「世界史探究」を位置付ける。
- 「地理総合」についても以下のような科目とすることが適当である。
 - ・ 持続可能な社会づくりを目指し、環境条件と人間の営みとの関わりに着目して現代の地理的な諸課題を考察する科目
 - ・ グローバルな視座から国際理解や国際協力の在り方を、地域的な視座から防災などの諸課題への対応を考察する科目
 - ・ 地図や地理情報システム (GIS) などを用いることで、汎用的で実践的な地理的技能を習得する科目
- 「地理総合」を発展的に学習する選択履修科目として「地理探究」を位置付ける。

(2) 学習指導の改善・充実等

- 「主体的・対話的で深い学び」の実現
 - ・ 児童生徒が学習課題を把握しその解決への見通しを持つこと（主体的な学び）
 - ・ 例えば、実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりする活動（対話的な学び）
 - ・ 「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動（深い学び）

(3) 各科目の改善・充実の要点

〔地理総合〕

- ア 「社会的事象の地理的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実
- イ 「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開
- ウ 地図や地理情報システムを活用して育む汎用的で実践的な地理的技能
- エ グローバルな視座から求められる自他の文化の尊重と国際協力
- オ 我が国をはじめとする世界や生徒の生活圏における自然災害と防災
- カ 持続可能な地域づくりのための地域調査と地域展望

〔地理探究〕

- ア 「社会的事象の地理的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実
- イ 「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開
- ウ 大項目Cの前提としての系統地理的考察と地誌的考察
- エ 「現代世界の系統地理的考察」における「交通・通信、観光」の項目化
- オ 「現代世界におけるこれからの日本の国土像」を問う探究活動の充実

〔歴史総合〕

- ア 「社会的事象の歴史的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実
- イ 「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開
- ウ 単元や内容のまとまりを重視した学習の展開
- エ 歴史の大きな変化に着目し、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える内容の構成
- オ 資料を活用し、歴史の学び方を習得する学習
- カ 現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する学習

〔日本史探究〕

- ア 「社会的事象の歴史的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実
- イ 「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開
- ウ 単元や内容のまとまりを重視した学習の展開
- エ 「歴史の解釈、説明、論述」を通じた知識、概念の深い理解と「思考力、判断力、表現力等」の育成の一層の重視
- オ 資料を活用し、歴史の学び方を習得する学習
- カ 歴史的経緯を踏まえた現代の日本の課題の探究

〔世界史探究〕

- ア 「社会的事象の歴史的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実
- イ 「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開
- ウ 単元や内容のまとまりを重視した学習の展開
- エ 世界の歴史の大きな枠組みと展開を捉える内容の構成
- オ 資料を活用し、歴史の学び方を習得する学習
- カ 歴史的経緯を踏まえた地球世界の課題の探究

3 教科の目標

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 現代世界の地域的特色と日本及び世界の歴史の展開に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 地理や歴史に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 地理や歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土や歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

4 科目の編成

地理歴史科は、次の5科目をもって編成されている。

科 目	標準単位数
地理総合	2 単位
地理探究	3 単位
歴史総合	2 単位
日本史探究	3 単位
世界史探究	3 単位

地理歴史科は、「地理総合」と「歴史総合」をいずれも全ての生徒に履修させることとし、その「地理総合」を履修した後に選択科目である「地理探究」を、同じく「歴史総合」を履修した後に選択科目である「日本史探究」、「世界史探究」を履修できる。

II 各科目の目標と内容

1 地理総合

(1) 科目の性格

- ア 持続可能な社会づくりを目指し、環境条件と人間の営みの関わりに着目して現代の地理的な課題を考察すること
- イ グローバルな視座から国際理解や国際協力の在り方を、地域的な視座から防災などの諸課題への対応を考察すること
- ウ 地図や地理情報システム（GIS）などを用いることで、汎用的で実践的な地理的技能を習得すること

(2) 科目の目標

社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性や、防災、地域や地球的課題への取組などを理解するとともに、地図や地理情報システムなどを用いて、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 地理に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとするものの大切さについての自覚などを深める。

(3) 内容

- A 地図や地理情報システムで捉える現代世界
 - (1) 地図や地理情報システムと現代世界
- B 国際理解と国際協力
 - (1) 生活文化の多様性と国際理解
 - (2) 地球的課題と国際協力
- C 持続可能な地域づくりと私たち
 - (1) 自然環境と防災
 - (2) 生活圏の調査と地域の展望

(4) 指導計画の作成と指導上の配慮事項

ア 中学校社会科との関連を図るとともに、目標に即して基本的な事柄を基に指導内容を構成すること。

- 諸事象を網羅的に扱ったり、諸要素の成因を細かく考察したり、用語や概念を細かく列挙してその解説に終始したりするような扱いは避ける。
- 大項目A・Bの学習を踏まえて大項目Cの学習ができるように配慮されているため、支障の無い限りこの順序に基づいて学習計画を作成する。

イ 地図の読図や作図、衛星画像や空中写真、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう系統性に留意して計画的に指導すること。その際、教科用図書「地図」を十分に活用するとともに、地図や統計などの地理情報の収集・分析には、地理情報システムや情報通信ネットワークなどの活用を工夫すること。

- 地理的技能については、地理情報を「収集する技能」、「読み取る技能」、「まとめる技能」の三つの技能に分けることが考えられる。
- インターネットにおける地図サイトや統計サイトとしては、「地域経済分析システム (RESAS)」（経済産業省等）、「政府統計の総合窓口 (e-Stat)」（総務省統計局）、「地理院地図」（国土交通省国土地理院）などの公的機関が提供しているものに加え、様々な機関や団体が提供する地図ソフトなどから地理情報を入手、活用することが可能である。

ウ 地図の読図や作図などを主とした作業的で具体的な体験を伴う学習を取り入れるとともに、各項目を関連付けて地理的技能が身に付くよう工夫すること。また、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論したりするなどの活動を充実させること。

○ それまでの学習成果を活用して、生活圏が抱える地理的な課題を捉え、作業的で具体的な体験を伴う学習を取り入れながら、その解決に向けた取組などについて考察、構想する中で、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論したりするなどの学習活動を充実することが大切である。

エ 学習過程では取り扱う内容の歴史的背景を踏まえることとし、政治的、経済的、生物的、地学的な事象なども必要に応じて扱うことができるが、それらは空間的な傾向性や諸地域の特色を理解するのに必要な程度とすること。

○ 地域の諸事象を考察していけば、必然的に政治的、経済的、生物的、地学的な事象などに発展していくことがあるが、それが発展したまま終わったのでは地理の学習から離れてしまうため、「政治的、経済的、生物的、地学的な事象に発展した学習成果を地理的な事象の空間的な傾向性や諸地域の特色と関連付け、地理的な考察のために活用する」ことが大切である。

オ 調査の実施や諸資料の収集に当たっては、専門家や関係諸機関などと円滑に連携・協働するなどして、社会との関わりを意識した活動を重視すること。

○ 中央教育審議会答申では、「家庭や学校、地域、国や国際社会の課題の解決を視野に入れ、学校の政治的中立性を確保しつつ、…現実の社会的事象を取り扱っていく」際に、「専門家や関係機関の協力を得て実践的な教育活動を行うとともに、現実の複雑な課題について児童生徒が課題や様々な対立する意見等を分かりやすく解説する新聞や専門的な資料等を活用することが期待される」ことが示されている。

カ 各項目の内容に応じて日本を含めて扱うとともに、日本と比較し関連付けて考察するようにすること。

○ 世界的な視野から、日本をその一地域として扱うことが大切である。
○ 各項目の指導に際しては、事例として取り上げる各地域と日本とを必要に応じて比較したり関連付けたりして、現代世界の地理に関わる諸事象の理解、認識が深められるよう工夫する。
○ 広い視野からグローバル社会における日本の役割について考えることができるよう配慮して扱うことが望まれる。

2 地理探究

(1) 科目の性格

ア 「地理総合」の学習によって身に付けた資質・能力を基に、系統地理的な考察、地誌的な考察によって習得した知識や概念を活用して、現代世界に求められるこれからの日本の国土像を探究する科目

イ 「地理総合」の学習を前提に、地理の学びを一層深め、生徒一人一人が「生涯にわたって探究を深める」その端緒となるよう、系統地理的学習、地誌的学習を行う各大項目の学習によって地理学の体系や成果を踏まえた上で、最後に我が国の地理的な諸課題を探究する大項目を設けて科目のまとめとして構成する

(2) 科目の目標

社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 地理に関わる諸事象に関して、世界の空間的な諸事象の規則性、傾向性や、世界の

諸地域の地域的特色や課題などを理解するとともに、地図や地理情報システムなどを用いて、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

- (2) 地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、系統地理的、地誌的に、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 地理に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとする大切さについての自覚などを深める。

(3) 内容

- A 現代世界の系統地理的考察
 - (1) 自然環境
 - (2) 資源、産業
 - (3) 交通・通信、観光
 - (4) 人口、都市・村落
 - (5) 生活文化、民族・宗教
- B 現代世界の地誌的考察
 - (1) 現代世界の地域区分
 - (2) 現代世界の諸地域
- C 現代世界におけるこれからの日本の国土像
 - (1) 持続可能な国土像の探究

(4) 指導計画の作成と指導上の配慮事項

ア 目標に即して基本的な事柄を基に指導内容を構成すること。

- 大項目Bは、大項目Aの学習成果を踏まえて、大項目Cは、大項目A、Bの学習成果を踏まえて学習できるよう配慮してある。
- 各大項目を構成する中項目の配列についても、それぞれの中項目のねらいや内容、学習の流れを考慮して位置付けを工夫しているので、支障のない限りこの順序に基づいて指導計画を作成する必要がある。
- 各大項目のねらいは、それを構成する中項目を学習することによって達成できることから、各大項目を構成する中項目を他の大項目に移して指導することも避ける必要がある。

イ 地図の読図や作図、衛星画像や空中写真、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう系統性に留意して計画的に指導すること。その際、教科用図書「地図」を十分に活用するとともに、地図や統計などの地理情報の収集・分析には、「地理総合」における学習の成果を生かし、地理情報システムや情報通信ネットワークなどの活用を工夫すること。

- 地理的技能は、一度の学習や経験で身に付くというものではなく、それに関わる学習を繰り返す中で、次第に習熟の程度を高めることで身に付けるものである。指導計画を作成する際に、地理的技能の難易度や段階性などに留意して系統的に学習できるよう工夫する必要がある。

ウ 地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論したりするなどの活動を充実させること。

- 事象を地図を通して読み取ったり、地図を通して表現したりと、地理的技能を用いて社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせる、地理ならではの言語活動の充実が

期待される。それを具体的に示した上記ウのような活動を学習過程の様々な場面で機を捉えて実施するとともに、引き続き工夫改善、充実していくことが求められる。

エ 学習過程では取り扱う内容の歴史的背景を踏まえることとし、政治的、経済的、生物的、地学的な事象なども必要に応じて扱うことができるが、それらは空間的な傾向性や諸地域の特色を理解するのに必要な程度とすること。

○ 教科のまとまりを踏まえ、科目間の関連を重視する旨を示したものである。「歴史的背景を踏まえる」ことで、地理の学習本来の「地域性」という空間軸からの視座とともに、時間軸という動的な視座から取り扱う内容を捉えることの重要性を意味している。

○ 地理の学習では、人文地理に関する内容は「公共」や「政治・経済」と、自然地理に関する内容は「地学」や「生物」に関する科目と関連が深い。指導計画の作成に当たっては、相互の科目の特性などを考慮して、関連、調整を図ることが大切である。

オ 調査の実施や諸資料の収集に当たっては、専門家や関係諸機関などと円滑に連携・協働するなどして、社会との関わりを意識した活動を重視すること。

○ 現実に生起している社会的事象を扱うことの多い地理の学習においては、学習内容の全体にわたる配慮事項として、この「社会との関わりを意識した活動を重視する」旨を明記することとしている。

カ 内容のA及びBについては、各項目の内容に応じて日本を含めて扱うとともに、日本と比較し関連付けて考察するようにすること。

○ 各項目の指導に際しては、事例として取り上げる各地域と日本とを必要に応じて比較したり関連付けたりして、現代世界の地理に関わる諸事象の理解、認識が深められるよう工夫する。

○ 社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせるとともに鍛え、広い視野からグローバル社会における日本の役割について考えることができるよう配慮して扱うことが望まれる。

3 歴史総合

(1) 科目の性格

ア 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を習得し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察、構想する科目

イ 「現代的な諸課題の形成に関わる歴史の大きな変化」として、以下の三つの変化に着目

○ 産業社会と国民国家の形成を背景として、人々の生活や社会の在り方が変化したこと。

○ 政治、外交、経済、思想や文化などの様々な面で国際的な結び付きが強まり、国家間の関係性が変化したことや個人や集団の社会参加が拡大したことを背景として、人々の生活や社会の在り方が変化したこと。

○ 科学技術の革新を背景に人・商品・資本・情報等が国境を越えて一層流動するようになり、人々の生活や社会の在り方が変化したこと。

(2) 科目の目標

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とそこの中の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸

資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

- (2) 近現代の歴史の変化に関わる事象の意味や意義，特色などを，時期や年代，推移，比較，相互の関連や現在とのつながりなどに着目して，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究，解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

(3) 内容

- A 歴史の扉
 - (1) 歴史と私たち
 - (2) 歴史の特質と資料
- B 近代化と私たち
 - (1) 近代化への問い
 - (2) 結び付く世界と日本の開国
 - (3) 国民国家と明治維新
 - (4) 近代化と現代的な諸課題
- C 国際秩序の変化や大衆化と私たち
 - (1) 国際秩序の変化や大衆化への問い
 - (2) 第一次世界大戦と大衆社会
 - (3) 経済危機と第二次世界大戦
 - (4) 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題
- D グローバル化と私たち
 - (1) グローバル化への問い
 - (2) 冷戦と世界経済
 - (3) 世界秩序の変容と日本
 - (4) 現代的な諸課題の形成と展望

(4) 内容の取扱い

- ① 大項目の構成
 - 大項目はそれぞれが内容のまとまりであると同時に，相互に関係性をもっており，この順序で学習することになっている。
 - 科目全体のまとめとなっているDの(4)の学習が充実するように，年間指導計画に基づいて，内容のつながりに留意した指導計画の作成を行うことが大切である。
- ② 大項目BからDまでの中項目の構成
 - 【中項目(1)の学習の特徴（身近な資料から考察する，過去への問い）】
 - 中項目(1)では，生徒にとって身近な生活や社会の変化を表す資料を取り上げて，情報を読み取ったりまとめたりして資料を活用する技能を身に付けるとともに，歴史の大きな変化に伴う生活や社会の変容について考察し，問いを表現する。
 - 【中項目(2)及び(3)の学習の特徴（主題を踏まえた考察と理解）】
 - 中項目(2)及び(3)では，中項目(1)の生徒が表現した問いを踏まえ，主題を設定し，資料を活用して課題を考察する。
 - 【中項目(4)の学習の特徴（歴史の大きな変化と現代的な諸課題）】
 - 大項目B及びCの中項目(4)では，中項目(1)から(3)までの学習内容を踏まえ，「自由・制限」，「平等・格差」，「開発・保全」，「統合・分化」，「対立・協調」など，現代

的な諸課題の形成に関わる歴史的な状況を考察するための観点を活用して主題を設定し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察し、表現する。

- 大項目Dの中項目(4)「現代的な諸課題の形成と展望」は、これまでの学習の成果を活用し、生徒が持続可能な社会の実現を視野に入れ、主題を設定し、歴史的な経緯を踏まえた現代的な諸課題の理解とともに、諸資料を活用して探究する活動を通し、その展望などについて考察、構想し、それを表現できるようにする。
- ③ 小項目の設定（事項ア「知識及び技能」と事項イ「思考力、判断力、表現力等」の関係）
 - 学習指導要領では、資質・能力の三つの柱に沿って「ア 知識及び技能」と「イ 思考力、判断力、表現力等」に関わる事項が示されているが、これは学習の順序を表すものではない。学習の過程では「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を身に付ける学習が一体となって展開され、深い理解に至ることが重要である。
 - 「歴史総合」の学習では、ア(ア)とイ(ア)の事項、ア(イ)とイ(イ)の事項、のように、各中項目内で対応する「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の事項が一体となり、それぞれ一つの学習のまとめ（小項目）を構成している。大項目B、C及びDの中項目(2)及び(3)の学習は、この小項目から構成されている。
- ④ 事象に関わる学習と問いの構造
 - 解説では、事象を学習する際に、主題を基にした「小項目全体に関わる問い」を踏まえ、「事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題（問い）」を設定し、さらに「事象を比較したり相互に関連付けたりして考察し理解を深めるための課題（問い）」を設定して考察の結果を表現するなど、段階的に課題（問い）を設定する学習を例として示している。
- ⑤ 課題（問い）の設定と資料の活用
 - 「歴史総合」では、学習全般において課題（問い）を設定し追究する学習が求められる。この学習において重要であるのは、第一に課題（問い）の設定であり、第二に課題（問い）の追究を促す資料の活用である。

(5) 指導計画の作成と指導上の配慮事項

ア この科目では、中学校までの学習との連続性に留意して諸事象を取り上げることで、生徒が興味・関心をもって近現代の歴史を学習できるよう指導を工夫すること。その際、近現代の歴史の変化を大観して理解し、考察、表現できるようにすることに指導の重点を置き、個別の事象のみの理解にとどまることのないよう留意すること。

- 個別の事象のみの理解にとどまるような学習ではなく、ひとまとまりの内容の焦点となり、歴史の展開を大観する上で柱となるような事柄に着目して学習内容を構成する。
- 大項目B、C及びDにおける(1)では「歴史の大きな変化に伴う生活や社会の変容について考察し、問いを表現する」学習が、大項目B、C及びDにおける各中項目(4)では「現代的な諸課題の形成に関わる」歴史を理解する学習や「現代的な諸課題を理解する」学習などが設定されている。
- いずれの大項目においても(1)から(4)までの中項目の関係から、内容のまとまりとしての大項目の構成を理解し、学習内容の構成を工夫することが重要である。

イ 歴史に関わる諸事象については、地理的条件と関連付けて扱うとともに、特定の時間やその推移及び特定の空間やその広がりの中で生起することを踏まえ、時間的・空間的な比較や関連付けなどにより捉えられるよう指導を工夫すること。

- 近現代の歴史の諸事象を地理的条件と関連付けて多面的・多角的に考察するようにする。その際、必修科目「地理総合」や中学校社会科地理的分野との関連を十分に踏まえるよう留意する。

- 歴史に関わる諸事象は、技術の発達や移動手段の変化、人々の交流や文化の動向などのように、その時期特有の状況が存在するなど、一定の時間的な要因の中で展開することを踏まえて理解することも大切である。

ウ 近現代の歴史と現代的な諸課題との関わりを考察する際には、政治、経済、社会、文化、宗教、生活などの観点から諸事象を取り上げ、近現代の歴史を多面的・多角的に考察できるようにすること。また、過去の視点のみで一面的に現在を捉えたり、現在の視点のみで一面的に過去を捉えたりすることがないように留意すること。

- 現代的な諸課題は、政治や経済、社会、文化、宗教、生活など歴史を構成する様々な要素が複雑に関係している。それらの要素についての経緯を結ぶことで、近現代の歴史と現代的な諸課題の関わりを考察することにとどまらず、様々な要素を踏まえた観点をもって考察することが大切であることを示している。
- 歴史的な経緯の過程には、社会的な環境や社会通念、技術の発達の諸段階など、その時期の特有の様々な状況が存在しており、過去のある事象への対処方法やその選択などが、現代と比較して同じ前提で行われていない。現代についての事象を過去と比較して考察する場合も同様であることに留意することが大切である。

エ 年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること。その際、歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義に気付くようにすること。また、科目の内容に関係する専門家や関係諸機関などとの円滑な連携・協働を図り、社会との関わりを意識した指導を工夫すること。

- 示された資料などの内容を無批判に受け入れるのではなく、自ら資料を収集・選択する力やそれを批判的に読み取って解釈し考察に生かす力、さらにその成果を年表や地図など自ら作成した資料の形で適切に表す力を身に付けることが大切である。
- 文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館の調査・見学などを取り入れることで、実物や複製品などの資料と接して、具体的で多様な情報を得て歴史の考察を深めさせることができる。
- これらの施設の果たす役割やそこにある諸資料を整理・保存し、利用に供することの意味や意義について考え、歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義に気付くようにすることが大切である。

オ 活用する資料の選択に際しては、生徒の興味・関心、学校や地域の実態などに十分配慮して行うこと。

- 歴史学習における多様な資料を生徒が十分に活用するためには、生徒が自身との関わりについて実感したり、具体性をもって考察したりできる資料を提示できるように留意することが大切である。
- 本科目においては、各中項目(1)において、各大項目の学習の導入として資料の活用が示されていることから、その資料の選択に際しては十分な配慮が必要となる。

カ 指導に当たっては、客観的かつ公正な資料に基づいて、事実の正確な理解に導くとともに、多面的・多角的に考察し公正に判断する能力を育成すること。その際、核兵器などの脅威に着目させ、戦争や紛争などを防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが重要な課題であることを認識するよう指導を工夫すること。

- 近現代の学習に当たっては、相異なる価値観や対立する立場の一方に偏しない客観性の高い資料に基づいて、事実の正確な理解に導くように留意し、史実の認識や評価に慎重を期する必要がある。
- 多様な資料を用い、異なった考え方を紹介することによって、歴史的な事実を一面的に取り上げたり一つの立場からのみ理解させたりすることを避け、生徒自身が歴史に関わる諸事象の背景や意味を様々な立場から考察することができるよう、歴史的な見方・考え方を働かせ、思考力、判断力、表現力等を養うようにすること。
- 科学技術の利用の在り方や宗教、民族を巡る紛争の頻発が、人類を取り巻く環境や社会、文化を地球的規模で破壊するに余りある脅威を伴うことに着目させ、各国が協

力して紛争や地球の環境破壊を防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが人類の生存とその文明の存立や諸国民の福祉のために重要な課題であることを認識させること。

4 日本史探究

(1) 科目の性格

- ア 「歴史総合」の学習によって身に付けた資質・能力を基に、我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解するとともに、事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを考察し、よりよい社会の実現を視野に、歴史的経緯を踏まえて、現代の日本の課題を探究する科目
- イ 「歴史総合」を踏まえ、従前の「日本史A」、「日本史B」のねらいを発展的に継承しつつ、我が国の歴史の展開について総合的な理解を深め、各時代の展開に関わる概念等を活用して多面的・多角的に考察し、歴史に見られる課題を把握し、地域や日本、世界の歴史の関わりを踏まえ、現代の日本の諸課題とその展望を探究する力を養うことをねらいとして設置
- ウ 我が国の歴史について、資料を活用し多面的・多角的に考察する力を身に付け、現代の日本の諸課題を見いだして、その解決に向けて生涯にわたって考察、構想することができる資質・能力を育成する科目として構成

(2) 科目の目標

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解するとともに、諸資料から我が国の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 我が国の歴史の展開に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、概念などを利用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

(3) 内容

- A 原始・古代の日本と東アジア
- (1) 黎明期の日本列島と歴史的環境
 - (2) 歴史資料と原始・古代の展望
 - (3) 古代の国家・社会の展望と画期（歴史の解釈、説明、論述）
- B 中世の日本と世界
- (1) 中世への転換と歴史的環境
 - (2) 歴史資料と中世の展望
 - (3) 中世の国家・社会の展望と画期（歴史の解釈、説明、論述）
- C 近世の日本と世界
- (1) 近世への転換と歴史的環境

- (2) 歴史資料と近世の展望
- (3) 近世の国家・社会の展望と画期（歴史の解釈，説明，論述）

D 近現代の地域・日本と世界

- (1) 近代への転換と歴史的環境
- (2) 歴史資料と近代の展望
- (3) 近現代の地域・日本と世界の画期と構造
- (4) 現代の日本の課題の探究

(4) 内容の取扱い

① 大項目の構成

- 大項目AからCまでの前近代の学習では、「歴史総合」で育んだ「歴史の学び方」を活用しつつ、多様な資料を効果的に活用して、問いや仮説を立てて歴史を考察、表現し、我が国の歴史の展開や伝統と文化への理解を深める学習、さらに大項目Dの近現代の学習では、「歴史総合」で獲得した概念やこの科目の前近代の学習とのつながり、前近代の学習で成長させた歴史を考察する力を活用し、歴史に関わる諸事象相互の関係性や、地域と日本、世界との関係性などについて構造的に整理して理解し、さらに現代の日本の諸課題について多面的・多角的に考察、構想する学習を設定している。従って、「内容のA，B，C及びDは、この順序で扱う」ことが大切である。

② 中項目の構成

- 大項目A，B，C及びDでは、それぞれの中項目(1)から(3)までが、以下のように結び付き、一連の学習の展開をもった構造となっている。
- 中項目(1)では、時代の転換を取り上げ、対象となる時代の我が国をめぐる対外的な環境や交流などや、中学校での学習を踏まえた国内の時代の特色の理解を基に、前の時代との比較などを通して時代の転換について考察して、時代の特色を探究するための筋道や学習の方向性を導く時代を通観する問いを表現する。
- 中項目(2)では、時代の特色を示す資料を活用して、(1)で表現した「時代を通観する問い」を成長させ、時代の特色について、(3)の学習への見通しを立てて探究的な学びに向かうための仮説を表現する。
- 中項目(3)では、中項目(1)及び(2)で表現された時代を通観する問いや仮説を踏まえ、資料を活用して、各時代の歴史の展開について、事象の意味や意義、関係性などを考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期を表現する。その際、歴史に関わる諸事象を解釈したり、説明したり、論述したりする学習を繰り返し行う中で、思考力、判断力、表現力等の育成を図る。

【中項目(1)の学習の特徴（時代の転換から考察する「時代を通観する問い」）】

- 各大項目における中項目(1)では時代の転換に関わる事象を基に、対象となる時代の我が国をめぐる対外的な環境や交流、国内の諸状況の変化などを扱い、国家・社会の変容を多面的・多角的に考察、表現し、時代の転換について理解することをねらいとしている。
- 時代の転換についての理解を踏まえて、(2)及び(3)の学習を見通した時代を通観する問いを表現できるようにする。

【中項目(2)の学習の特徴（資料から形成する「仮説」）】

- 各大項目の中項目(2)は、従前の「歴史と資料」に示された、「諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習」の趣旨を一層充実させる観点から、大きく以下の二つのねらいを示した。
 - ・ 時代の転換を扱った中項目(1)を踏まえ、対象となる時代の特色について多面的・多角的に考察し、生徒が仮説を表現し、続く(3)の学習の視点を形成すること
 - ・ 諸資料に基づいて歴史が叙述されていることを踏まえ、資料を活用する技能を高めるとともに、歴史で活用する多くの資料について、様々な人々による保存・保全などの努力が図られていることに気付くようにすること

- 中項目(2)に示した仮説とは、時代の特色について考察し、(3)の学習に向けてその時代を展望するものである。(1)で学習した時代の転換における変化が、その後の展開にどのような関係性をもつかについて、資料などから読み取った情報などから根拠に基づいて表現するものである。
- 中項目(2)におけるもう一つのねらいは、資料を活用する技能を身に付けることである。年表や地図のほかにも、文学作品や文書などの文献資料、絵画や地図、写真等の図像資料、映画や録音などの映像・音声資料、日常生活用品を含めた遺物、地名、伝承などの諸資料が活用できる。
- 博物館、図書館、公文書館や資料館等の果たす役割やそこに展示・保存されている資料、地域の遺跡、景観や無形文化財などが、これまでどのように受け継がれてきたかなどの視点に着目し、「歴史資料や遺構の保存・保全などの努力が図られていることに気付く」ことなどを通して、文化財保護への関心を高め、地域の文化遺産を尊重する態度を養うことも重要である。

【中項目(3)の学習の特徴（主題を踏まえた考察と理解）】

- 中項目(3)は、中項目(1)及び(2)で表現された時代を通観する問いや仮説を踏まえ、資料を活用して、各時代の歴史の展開について、主題を設定し、事象の意味や意義、関係性などを考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期を表現するなどの学習を通じて、深い理解に至る学習の過程について示している。
- 大項目Dの(3)は「歴史総合」での近現代の学習を踏まえて、地域・日本と世界の相互の関係を構造的に整理しつつ、大項目AからCまでの前近代の学習内容と近現代との連続性や変化に留意するとともに、前近代の学習で身に付けた資料活用の技能や歴史を考察し表現する力を活用し、多様な視点から歴史に関わる諸事象について深い理解を図ることをねらいとしている。

【歴史の解釈、説明、論述】

- 大項目A、B及びCの中項目(3)に示された「(歴史の解釈、説明、論述)」については、従前の「日本史B」に中項目として設定されていた「歴史の解釈」、「歴史の説明」、「歴史の論述」を引き継ぐとともに、その趣旨を一層充実させたことを示している。
- 従前の「日本史B」では段階的な思考力等の育成を目指して、それぞれ大項目「(2)中世の日本と東アジア」に「歴史の解釈」、「(3)近世の日本と世界」に「歴史の説明」、「(6)現代の日本と世界」に「歴史の論述」が、それぞれ独立した中項目として示されていたが、今回の改訂では、必修科目として設置された「歴史総合」の成果を踏まえることで、「日本史探究」の全ての中項目(3)において、資料から歴史に関わる事象を解釈したり、説明したり、論述したりする学習を取り入れて、繰り返しそれを行うことで、習得した知識や概念のより深い理解を図ること、思考力、判断力、表現力等の一層の育成を図ることとした。

【中項目(4)の特徴（現代の日本の課題の探究）】

- 大項目Dの中項目(4)は「日本史探究」のまとめとして、現代の日本の課題の形成に関わる歴史と展望について、多面的・多角的に考察、構想し、その結果を表現する学習である。
 - 従前の「日本史B」の(6)ウ「歴史の論述」の趣旨を一部引き継ぎつつ、持続可能な社会の実現を視野に入れ、生徒が地域社会や身の回りの事象と関連させた主題を設定して探究する学習活動である。
- ③ 小項目の設定（事項ア「知識及び技能」と事項イ「思考力、判断力、表現力等」の関係）
- 今回の改訂学習指導要領では、資質・能力の三つの柱に沿って「ア 知識及び技能」と「イ 思考力、判断力、表現力等」に関わる事項が示されているが、これは学習の順序を表すものではない。
 - 学習の過程では「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を身に付ける学習が一体となって展開され、深い理解に至ることが重要である。そのため、「日本史探究」の学習では、ア(ア)とイ(ア)の事項、ア(イ)とイ(イ)の事項、のように、各中項目

内で対応する「知識及び技能」,「思考力,判断力,表現力等」の事項が一体となり,それぞれ一つの学習のまとまりを構成している。

○ 大項目AからDまでの中項目(3)の学習は,この小項目によって構成されている。

【小項目全体の構造の例】

(3) 近世の国家・社会の展開と画期 (歴史の解釈,説明,論述)

小項目(ア)

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 〈a〉法や制度による支配秩序の形成と身分制,貿易の統制と対外関係,技術の向上と開発の進展,学問・文化の発展などを基に,〈b〉幕藩体制の確立,近世の社会と文化の特色を理解すること。

イ 次のような思考力,判断力,表現力等を身に付けること。

(イ) 〈c〉織豊政権との類似と相違,アジアの国際情勢の変化,交通・流通の発達,都市の発達と文化の担い手との関係などに着目して,〈d〉主題を設定し,〈e〉近世の国家・社会の展開について,事象の意味や意義,関係性などを多面的・多角的に考察し,〈f〉歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

○ 例えば,(3)のア(ア)とイ(イ)から構成される「(3)の小項目(ア)」の学習に当たっては,ア(ア)の〈a〉法や制度による支配秩序の形成と身分制,貿易の統制と対外関係,技術の向上と開発の進展,学問・文化の発展などを基に,イ(イ)の〈c〉織豊政権との類似と相違,アジアの国際情勢の変化,交通・流通の発達,都市の発達と文化の担い手との関係などに着目して,教師が例えば,「江戸幕府の支配の特徴と江戸初期の文化の背景」などの〈d〉主題を設定し,その主題を「幕藩体制が確立し,長い間維持されたのはなぜだろうか」などの学習上の課題とするための「小項目全体に関わる問い」として設定して生徒に提示する。

○ この「小項目全体に関わる問い」を踏まえて,〈e〉近世の国家・社会の展開について事象の意味や意義,関係性などを多面的・多角的に考察し,〈f〉歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現する学習を行うことで,アの事項の〈b〉幕藩体制の確立,近世の社会と文化の特色を理解することに至る学習の過程が考えられる。

○ つまり,アの事項の〈a〉を基に,イの事項の〈c〉に着目して,〈d〉主題を設定し,それに応じた「小項目全体に関わる問い」を学習上の課題として生徒に提示する。この「問い」を踏まえて〈e〉を考察し,〈f〉を表現する学習を通して,アの〈b〉の理解に至るという構造となっている。

④ 事象に関わる学習と問いの構造

○ 各小項目の主題を基にした「小項目全体に関わる問い」を踏まえ,〈e〉を考察し,〈f〉を表現する学習について,本則上の〈a〉「法や制度による支配秩序の形成と身分制」,「貿易の統制と対外関係」など,「～基に」の前に示された事象それぞれについて,以下のiからiiiまでの,段階的な三つの課題(問い)を設定した学習の構成を示している。

i 事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題(問い)

ii 事象の意味や意義,関係性などを考察し理解を促すための課題(問い)

iii 諸事象の解釈や画期を考察し表現することを促すための課題(問い)

例：C「近世の日本と世界」(3)の小項目(ア)における課題(問い)を設定した学習【事象の意味や意義,関係性などを考察する学習】

この事項に示されたそれぞれの事象の学習については,示された視点に着目して,推移や展開を考察した上で,事象の意味や意義,関係性などを多面的・多角的に考察する学習が大切となる。

法や制度による支配秩序の形成と身分制については,織豊政権との類似と相違などに着目し,織豊政権と比較した江戸幕府の統制の特徴などについて,推移や展開を

考察するための課題（問い）（上記 i の課題（問い））を設定し、織豊政権下の諸政策と幕府の法や制度の確立との関係や、織豊政権と江戸幕府の支配の構造の相違点、新たな制度の下での人々の生活を確認するなどの学習が考えられる。

次に、例えば、「戦乱がなくなったことが人々の生活や社会にどのような影響を与えたのだろうか」などの、意味や意義、関係性を考察するための課題（問い）（上記 ii の課題（問い））を設定し、その時代に暮らす人々の生活や意識がどのように変化したのかを、大きな戦乱のない時代が創出されたことの意義と関連付けて多面的・多角的に考察する学習活動を取り入れることが考えられる。（後略）。

【諸事象の解釈や画期を表現する学習】

この小項目の内容の確かな理解を図るためには、生徒が上記の意味や意義、関係性などの考察を踏まえて、考察の結果を根拠や論理をもって筋道を立てて説明したり、歴史に関わる諸事象についての複数の解釈や、歴史の展開における様々な画期について考察した結果を表現したりする学習が重要となる。

例えば、「幕藩体制の確立の過程で、あなたが最も重要な意味をもつと考えられる出来事は何だろうか」…（中略）…などの諸事象の解釈や画期を考察し表現するための課題（問い）（上記 iii の課題（問い））を設定して、江戸時代初期の諸政策のもたらした影響や変化、…（中略）…などを考察し、資料などの根拠を示して考察の結果を表現する学習などが考えられる。…（後略）。

- 解説文中には学習指導要領の趣旨を明確にするために様々な課題（問い）が示されているが、ここに示され課題（問い）はあくまでも参考の事例である。実際の学習においては、教師が生徒の学習状況や興味・関心を見極めつつ、ねらいに則した適切な課題（問い）を設定するよう、留意することが大切である。
- ⑤ 課題（問い）の設定と資料の取扱い
 - 「日本史探究」の学習において重要であるのは、第一に課題（問い）の設定であり、第二に課題（問い）の追究を促す資料の活用である。
 - 生徒が課題（問い）を考察したり、お互いに意見を表明したりする際も、適切な資料を基に、根拠を踏まえて考察するよう、指導を工夫することが重要である。

(5) 指導計画の作成と指導上の配慮事項

ア 我が国の歴史と文化について各時代の国際環境や地理的条件などと関連付け、世界の中の日本という視点から考察できるよう指導を工夫すること。

- 「歴史総合」との関連に留意し、そこで学習したことを生かすなど指導上の工夫を図り、各時代における国際環境について、年表、絵画や写真、関係図など適切な資料の活用を図るなどして関心を高めるとともに、国内外の諸事象間の因果関係を考察できるようにする指導も重視する必要がある。
- 歴史上の出来事の舞台となった諸地域について地図帳などの活用を図りながら学習するなど、我が国の歴史と文化を地理的条件と関連付けて多面的・多角的に考察できるようにする。その際、必修科目「地理総合」や中学校社会科地理的分野との関連を十分に踏まえるよう留意する。
- カリキュラム・マネジメントの視点から、例えば、国語科の古典関係の科目、数学の数学史など歴史的展開に関する部分、芸術科の伝統的な芸術と社会や文化との関わりの部分、特別活動の学校行事、総合的な探究の時間などとの関連部分がどのようなものか、またそれらを「日本史探究」の指導計画にどう関連付け、活用するかについて、幅広い配慮や工夫をすることも大切である。

イ この科目では、中学校までの学習や「歴史総合」の学習との連続性に留意して諸事象を取り上げることにより、生徒が興味・関心をもって我が国の歴史の展開を学習できるように工夫すること。その際、我が国の歴史を大観して理解し、考察、表現できるようにすることに指導の重点を置き、個別の事象のみの理解にとどまることのないよう留意すること。また、各時代の特色を総合的に考察する学習及び前後の時代を比較して

その移り変わりを考察する学習の充実を図ること。

○ 大項目のA, B, C及びDの中項目(1)には、前後の時代を比較して時代の転換を考察し、その後の学習の見通しを立てる学習が設定されている。(1)から(3)までの中項目の関係から、内容のまとまりとしての大項目の構成を理解し、学習内容の構成を工夫することが重要である。

ウ 年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、地域の文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること。その際、歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義、文化財保護の重要性に気付くようにすること。また、科目の内容に関係する専門家や関係諸機関などとの円滑な連携・協働を図り、社会との関わりを意識した指導を工夫すること。

○ 平素の学習において、示された資料などの内容を無批判に受け入れるのではなく、自ら資料を収集・選択する力やそれを批判的に読み取って解釈し考察に生かす力、さらにその成果を年表や地図など自ら作成した資料の形で適切に表す力を身に付けることが大切である。

○ 学校図書館や地域の公共施設の果たす役割やそこにある諸資料を整理・保存し、利用に供することの意味や意義について考えたり、文化財保護への関心を高めたりして、歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義、文化財保護の重要性に気付くようにすることが大切である。

エ 活用する資料の選択に際しては、生徒の興味・関心、学校や地域の実態などに十分配慮して行うこと。

○ 生徒が自身との関わりについて実感したり、具体性をもって考察したりできる資料として提示できるように留意することが大切であることを示している。また、学校や地域の実態の中から、生徒が主体的に考察できるような資料を選択して示すことも大切である。特に、本科目においては、各中項目(1)において、各大項目の学習の導入として資料の活用が示されていることから、その資料の選択に際しては十分な配慮が必要となる。

オ 近現代史の指導に当たっては、客観的かつ公正な資料に基づいて、事実の正確な理解に導くとともに、多面的・多角的に考察し公正に判断する能力を育成すること。その際、核兵器などの脅威に着目させ、戦争や紛争などを防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが重要な課題であることを認識するよう指導を工夫すること。

○ 近現代の学習に当たっては、相異なる価値観や対立する立場の一方に偏しない客観性の高い資料に基づいて、事実の正確な理解に導くように留意し、史実の認識や評価に慎重を期する必要がある。

○ 多様な資料を用い、異なった考え方を紹介することによって、歴史的な事実を一面的に取り上げたり一つの立場からのみ理解させたりすることを避け、生徒自身が歴史に関わる諸事象の背景や意味を様々な立場から考察することができるよう、歴史的な見方・考え方を働かせ、思考力、判断力、表現力等を養うようにすることが重要である。

○ 科学技術の利用の在り方や宗教・民族を巡る紛争の頻発が、人類を取り巻く環境や社会、文化を地球的規模で破壊するに余りある脅威を伴うことに着目させ、各国が協力して紛争や地球の環境破壊を防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが人類の生存とその文明の存立や諸国民の福祉のために重要な課題であることを認識させることも必要である。

カ 近現代史の指導に当たっては、「歴史総合」の学習の成果を踏まえ、より発展的に学習できるように留意すること。

○ 近現代の歴史の変化に関わる諸事象を世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉えたり、それらの意味や意義、特色を考察したりするなど、「歴史総合」の学習の成果を十分に活用し、我が国の近現代の歴史について、世界の各国や他の地域との歴史の関係を踏まえた具体的な考察ができるように指導を工夫することを示している。

- 「歴史総合」で身に付けた資料の活用の技能や、生徒が問いを表現する学習、主題を設定して考察、表現する学習、現代的な諸課題の形成や展望を構想する学習などの成果を十分に踏まえ、指導を工夫することが重要である。

キ 文化に関する指導に当たっては、各時代の文化とそれを生み出した時代的背景との関連、外来の文化などとの接触や交流による文化の変容や発展の過程などに着目させ、我が国の伝統と文化の特色とそれを形成した様々な要因を総合的に考察できるよう指導を工夫すること。衣食住や風習・信仰などの生活文化についても、時代の特色や地域社会の様子などと関連付け、民俗学や考古学などの成果の活用を図りながら扱うようにすること。

- 伝統や文化に関する学習については、我が国の歴史的形成過程を世界の歴史と関連付けて総合的・系統的に考察する中で、我が国の伝統や文化についての認識を深めさせるようにしている。このため、大項目AからDまでのそれぞれの中項目(2)においては様々な歴史資料の活用や文化財保護の重要性について学習し、続く中項目(3)においては各時代の国家、社会の動向とともに文化の特色を総合的に考察する。

ク 地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てるようにすること。

- 指導に当たっては、新旧の地形図や写真のほか県史や市町村史、学校ほか諸団体の沿革史など各種資料の活用、情報通信ネットワークを利用した情報の収集・活用を図るとともに、博物館や公文書館、その他の資料館の利用、聞き取り調査、現地での文化財の観察など「歩く、見る、聞く」ことによる様々な学習方法の工夫が望まれる。作業的で具体的な体験を伴う学習を重視するとともに有効な考察の観点を示すなどして、生徒の主体的な学習姿勢を引き出すことが大切である。

5 世界史探究

(1) 科目の性格

- ア 「歴史総合」の学習によって身に付けた資質・能力を基に、世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、事象の意味や意義、特色などを考察し、よりよい社会の実現を視野に、歴史的経緯を踏まえて、地球世界の課題を探究する科目
- イ 「歴史総合」の学習を踏まえ、従前の「世界史A」、「世界史B」のねらいを発展的に継承しつつ、諸地域の歴史的特質の形成、諸地域の交流・再編、諸地域の結合・変容という構成に沿って、世界の歴史の大きな枠組みと展開について理解を深め、地球世界の課題とその展望を探究する力を養うことをねらいとして設置
- ウ 詳細で専門的な世界の歴史を学ばせようとするものではなく、中学校社会科や「歴史総合」の学習を踏まえ、日本の歴史との関連にも配慮しつつ、世界の歴史への興味・関心を高め、生徒が抱いた疑問や追究してみたい事柄について表現した問いを基に、世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色を考察し、思考力、判断力、表現力等を一層育み、地球世界の課題をその解決を視野に、主体的に探究する力を育成することを目指した科目

(2) 科目の目標

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を

適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

- (2) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義，特色などを，時期や年代，推移，比較，相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

(3) 内容

- A 世界史へのまなざし
 - (1) 地球環境から見る人類の歴史
 - (2) 日常生活から見る世界の歴史
- B 諸地域の歴史的特質の形成
 - (1) 諸地域の歴史的特質への問い
 - (2) 古代文明の歴史的特質
 - (3) 諸地域の歴史的特質
- C 諸地域の交流・再編
 - (1) 諸地域の交流・再編への問い
 - (2) 結びつくユーラシアと諸地域
 - (3) アジア諸地域とヨーロッパの再編
- D 諸地域の結合・変容
 - (1) 諸地域の結合・変容への問い
 - (2) 世界市場の形成と諸地域の結合
 - (3) 帝国主義とナショナリズムの高揚
 - (4) 第二次世界大戦と諸地域の変容
- E 地球世界の課題
 - (1) 国際機構の形成と平和への模索
 - (2) 経済のグローバル化と格差の是正
 - (3) 科学技術の高度化と知識基盤社会
 - (4) 地球世界の課題の探究

(4) 内容の取扱い

- ① 大項目の構成
 - 大項目 A については，科目の導入的性格を有するものであり，中学校社会科との接続や「歴史総合」で習得した成果に配慮し，人類の生存基盤をなす自然界に見られる諸事象や日常生活に見られる諸事象を扱う。「歴史総合」に比較して，広い空間軸，長い時間軸を扱うこの科目の特色，意味や意義を考察，理解し，世界史学習の導入とする。
 - 大項目 B から D については，世界の歴史の大きな枠組みと展開を，諸地域を軸にその歴史的特質の形成，交流・再編，結合・変容から構造的に理解することをねらいとしている。
 - 中項目 (1) では，「歴史総合」の「問いを表現する」学習の成果を活用し，大項目 B の諸地域の歴史的特質の形成，大項目 C の諸地域の交流・再編，大項目 D の諸地域の結合・変容を構造的に捉えるための観点について考察し，生徒が問いを表現する学習活動を行い，その後の学習内容への課題意識や見通しをもたせることが大切である。

- 大項目Eについては、「(1) 国際機構の形成と平和の模索」から「(3) 科学技術の高度化と知識基盤社会」までの中項目において、課題を追究したり解決したりする活動を通してそれぞれ地球世界の課題を理解する。
 - 「(4) 地球世界の課題の探究」は、中項目(1)から(3)で学習したことを踏まえ、①紛争解決や共生、②経済格差の是正や経済発展、③科学技術の発展や文化の変容に関わる課題に関連する主題を生徒が設定し探究する学習活動を「世界史探究」のまとめとして位置付けている。
 - これらの大項目はそれぞれが内容のまとまりであると同時に、相互に関係性をもっており、この順序で学習することになっている。また、科目全体のまとめとなっているEの(4)の学習が充実するように、年間指導計画に基づいて、内容のつながりに留意した指導計画の作成を行うことが大切である。
- ② 大項目BからDまでの中項目の構成
- 大項目B、C及びDでは、社会的な事象の歴史的な見方・考え方や資料の取扱いに関する基本的な技能を活用して、生徒が資料から課題を見だし、自ら学習を深めることができるように、それぞれ中項目が設定されており、以下のように結び付いた一連の学習の展開を構成している。

【中項目(1)の学習の特徴】

- 中項目(1)では、生徒の学習意欲を喚起する具体的な事例を取り上げ、諸資料を活用し情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けるとともに、諸地域の歴史的特質の形成、諸地域の交流・再編、諸地域の結合・変容を読み解く観点について考察し、問いを表現する。
- 問いを表現するとは、資料から、生徒が情報を読み取ったりまとめたり、複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより、興味・関心をもったこと、疑問に思ったこと、追究したいことなどを見いだす学習活動を意味している。
- 教師は続く(2)、(3)及び(4)の学習において、生徒の表現した問いを基に主題を設定したり、学習過程において生徒の表現した問いに触れたりするなどの学習活動を行うことを想定して、大項目の学習全体を見通した指導計画を工夫することが大切である。

【中項目(2)、(3)及び(4)の学習の特徴】

- 中項目(2)、(3)及び(4)では、主題を設定し、生徒の課題意識を深めたり、新たな課題を見いだしたりすることができるように、資料を活用して課題を考察する。
 - 主題の設定に当たっては、中項目(1)の生徒が表現した問いを踏まえ、学習のねらいに則した考察を導くように留意する。
- ③ 小項目の設定（事項ア「知識及び技能」と事項イ「思考力、判断力、表現力等」の関係）
- 学習指導要領では、資質・能力の三つの柱に沿って「ア 知識及び技能」と「イ 思考力、判断力、表現力等」に関わる事項が示されているが、これは学習の順序を表すものではない。
 - 学習の過程では「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を身に付ける学習が一体となって展開され、深い理解に至ることが重要である。そのため、「世界史探究」の学習では、ア(ア)とイ(ア)の事項、ア(イ)とイ(イ)の事項、のように、各中項目内で対応する「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の事項が一体となり、それぞれ一つの学習のまとまり（小項目）を構成している。
 - 大項目B、C及びDの中項目(2)、(3)及び(4)の学習は、この小項目から構成されている。

【小項目全体の説明の例】

(3) 諸地域の歴史的特質

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) <a>秦・漢と遊牧国家、唐と近隣諸国の動向などを基に、東アジアと中央

ユーラシアの歴史的特質を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) <c>東アジアと中央ユーラシアの歴史に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互の関わりなどに着目し、<d>主題を設定し、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、<e>唐の統治体制と社会や文化の特色、唐と近隣諸国との関係、遊牧民の社会の特徴と周辺諸地域との関係などを多面的・多角的に考察し、表現すること。

- (3)の(ア)とイ(ア)から構成される「(3)の小項目(ア)」の学習に当たっては、ア(ア)の<a>秦・漢と遊牧国家、唐と近隣諸国の動向などを基に、イ(ア)の<c>東アジアと中央ユーラシアの歴史に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互の関わりなどに着目し、教師が例えば、「東アジアや中央ユーラシアの社会や文化の特徴」などの<d>主題を設定し、その主題を、「東アジアや中央ユーラシアは、社会、宗教、文化・思想の面でどのような特徴をもっていたのだろうか」などの学習上の課題とするための「小項目全体に関わる問い」として設定して生徒に提示する。
 - この「小項目全体に関わる問い」を踏まえて、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解くなどして、<e>唐の統治体制と社会や文化の特色、唐と近隣諸国との関係、遊牧民の社会の特徴と周辺諸地域との関係などを多面的・多角的に考察したり表現したりすることにより、アの(ア)の東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質を理解することに至る学習の過程が考えられる。
 - アの事項の<a>を基に、イの事項の<c>に着目して、<d>主題を設定し、それに応じた「小項目全体に関わる問い」を学習上の課題として生徒に提示する。この「問い」を踏まえて、<e>を考察し表現して、アのの理解に至るという構造になっている。
- ④ 事象に関わる学習と問いの構造
- 解説本文では、小項目全体の説明の後に、<a>に示された複数の事象について、考察し表現するためのそれぞれの事象の取扱い方を以下のように示している。
- 【(ア)の<a>のうち、唐と近隣諸国の動向についての学習の展開例】
- <a>の事象を学習する際に、小項目の主題を基にした「小項目全体に関わる問い」を踏まえ、「事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題（問い）」（以下、「推移や展開を考察するための課題（問い）」）を設定し、さらに「事象を比較したり相互に関連付けたりして考察し、追究を促すための課題（問い）」（以下、「事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）」）を設定して考察の結果を表現するなど、段階的に課題（問い）を設定する学習を例として示している。

例：唐と近隣諸国の動向について、課題（問い）を設定した学習の例

例えば、「唐は近隣諸国にどのように接していたのだろうか」などの、推移や展開を考察するための課題（問い）を教師が設定する。生徒は、諸資料を活用して、唐と近隣諸国の関係の特徴などを読み取ったり、近隣諸国の共通点やそれぞれの相違点を考察したりして東アジアの国際秩序の特徴を理解する。

次に、「あなたは、日本が国家形成にあたって、唐に学んだことで最も重要だったことは何だと考えるか」などの、事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）を設定し、遣唐使の活動や正倉院の遺物などを示し、東アジアの中の日本の位置付けを多面的・多角的に考察し、表現する。

- 本解説では、具体的な課題（問い）については、各小項目の<a>の事象のうちの一つのみの例を示している。例に示した事象以外についても、同様に段階的な課題（問い）を設定して学習することが大切である。
- ⑤ 課題（問い）の設定と資料の取扱い
- 「世界史探究」では、学習全般において課題（問い）を設定し追究する学習が求められる。この学習において重要であるのは、第一に課題（問い）の設定であり、第二に課題（問い）の追究を促す資料の活用である。

(5) 指導計画の作成と指導上の配慮事項

ア この科目では、中学校までの学習や「歴史総合」の学習との連続性に留意して諸事象を取り上げることにより、生徒が興味・関心をもって世界の歴史を学習できるよう指導を工夫すること。その際、世界の歴史の大きな枠組みと展開を構造的に理解し、考察、表現できるようにすることに指導の重点を置き、個別の事象のみの理解にとどまることのないように留意すること。

- 世界の歴史の大きな枠組みと展開を空間軸と時間軸の二つから、総合的に考察して大きく捉えることが重要である。平素の学習において、個別の事象のみの理解にとどまるような学習ではなく、ひとまとまりの内容の焦点となり、歴史の展開を大観する上で柱となるような事項・事柄に着目して学習内容を構成する必要がある。
- 目標に示された「概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握して解決を視野に入れて構想したりする力、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」観点から、一層明確に学習内容の構成に留意する必要がある。
- 「歴史総合」の学習などの成果を踏まえて、世界の歴史の大きな枠組みと展開を構造的に理解することができるように、大項目B、C及びDにおける各中項目(1)において、歴史を捉える切り口である観点に基づいて考察し問いを表現し、生徒に課題意識や学習の見通しをもたせるなど、その構成を工夫することが重要である。
- カリキュラム・マネジメントの視点から、例えば、国語科の古典関係の科目、数学の数学史など歴史的展開に関する部分、芸術科の伝統的な芸術と社会や文化との関わりの部分などとの関連部分がどのようなものか、またそれらを「世界史探究」の指導計画にどう関連付け、活用するかについて、幅広い配慮や工夫をすることも大切である。

イ 歴史に関わる諸事象については、地理的条件と関連付けて扱うとともに、特定の時間やその推移及び特定の空間やその広がりの中で生起することを踏まえ、時間的・空間的な比較や関連付けなどにより捉えられるよう指導を工夫すること。

- 歴史に関わる諸事象と「地理的条件」との関連付けが一層重視されている。歴史上の出来事の舞台となった諸地域について地図帳などの活用を図りながら学習するなど、歴史に関わる諸事象を地理的条件と関連付けて多面的・多角的に考察するようにする。
- 歴史に関わる諸事象は、技術の発達や移動手段の変化、人々の交流や文化の動向などのように、その時期特有の状況が存在するなど、一定の時間的な要因の中で展開することを踏まえて理解することも大切である。

ウ 年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、文化遺産、博物館やその他の資料館などの施設を調査・見学するなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること。その際、歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義に気付くようにすること。また、科目の内容に関係する専門家や関係諸機関などとの円滑な連携・協働を図り、社会との関わりを意識した指導を工夫すること。

- 「世界史探究」の学習では、その目標において「諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付ける」ことが明示されているように、「年表や地図、その他の資料を積極的に活用」することが重視されている。
- 指導に当たっては、「生徒が主体的に情報手段を活用できるようにする」こと及び「地図や年表を読んだり作成したり」することを重視する必要がある。平素の学習において、示された資料などの内容を無批判に受け入れるのではなく、自ら資料を収集・選択する力やそれを批判的に読み取って解釈し考察に生かす力、さらにその成果を年表や地図など自ら作成した資料の形で適切に表す力を身に付けることが大切である。

エ 活用する資料の選択に際しては、生徒の興味・関心、学校や地域の実態などに十分配慮して行うこと。

- 生徒が自身との関わりについて実感したり、具体性をもって考察したりできる資料を提示するように留意することが大切である。また、学校や地域の実態の中から、生徒が主体的に考察できるような資料を選択して示すことも大切である。

オ 近現代史の指導に当たっては、客観的かつ公正な資料に基づいて、事実の正確な理解に導くとともに、多面的・多角的に考察し公正に判断する能力を育成すること。その際、核兵器などの脅威に着目させ、戦争や紛争などを防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが重要な課題であることを認識するよう指導を工夫すること。

- 相異なる価値観や対立する立場の一方に偏しない客観性の高い資料に基づいて、事実の正確な理解に導くように留意し、史実の認識や評価に慎重を期する必要がある。
- 多様な資料を用い、異なった考え方を紹介することによって、歴史的な事実を一面的に取り上げたり一つの立場からのみ理解させたりすることを避け、生徒自身が歴史に関わる諸事象の背景や意味を様々な立場から考察することができるよう、歴史的な見方・考え方を働かせて思考力・判断力・表現力等を養うようにすることが重要である。
- 科学技術の利用の在り方や宗教、民族を巡る紛争の頻発が、人類を取り巻く環境や社会、文化を地球的規模で破壊するに余りある脅威を伴うことに着目させ、各国が協力して紛争や地球の環境破壊を防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが人類の生存とその文明の存立や諸国民の福祉のために重要な課題であることを認識させることも必要である。

カ 近現代史の指導に当たっては、「歴史総合」の学習の成果を踏まえ、より発展的に学習できるよう留意すること。

- 近現代の歴史の変化に関わる諸事象を世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉えたり、それらの意味や意義、特色を考察したりするなど、「歴史総合」の学習の成果を十分に活用し、世界の歴史の大きな枠組みと展開について、日本の歴史と関連付けながら具体的な考察ができるように指導を工夫することを示している。
- 「歴史総合」で身に付けた資料の活用の技能や、生徒が問いを表現する学習、現代的な諸課題の形成や展望を構想する学習などの成果を十分に踏まえ、指導を工夫することが重要である。

III Q & A

Q1 必履修科目と選択科目の開設に際し、どのような点に気をつけて教育課程編成を行う必要がありますか？

A 地理歴史科では、「地理総合」と「歴史総合」のいずれも全ての生徒に履修させる必履修科目とし、学習の系統性を踏まえ、「地理総合」を履修した後に選択科目である「地理探究」を、「歴史総合」を履修した後に選択科目である「日本史探究」「世界史探究」を履修することとしています。

そこで、必履修科目の履修を前提に選択科目の履修を可能にするというこの教科の基本的な構造に留意し、その順序性について、学習指導要領に則った教育課程の編成が必要になります。

また、学習指導要領においては、学期の区分に応じて科目を履修し単位を認定できるという単位制の学校の実態などに配慮し、同一年次における科目の開設についての直接の規定は設けられておりませんが、同一年次において「地理総合」と「地理探究」、「歴史総合」と「日本史探究」「世界史探究」の科目を年度の最初から並行で履修するといった履修の順序性を踏まえない教育課程編成は不適切です。

なお、あつてはならないことですが、「歴史総合」の後に「日本史探究」または「世界史探究」を履修する教育課程を編成したうえで、実際は「歴史総合」として設定された時間

に「歴史総合」の内容を指導せず、「日本史探究」「世界史探究」の内容のうち古代等の時期区分にあたる内容を先に時系列で指導し、近現代の時期を指導する際に必修科目である「歴史総合」を履修したこととするようなことは認められないことです。

各学校では、学習指導要領に基づいた教育課程の編成、実施が行われることが大切であり、生徒に不利益が生じないよう適切な教育課程編成を行うことが必要です。

Q 2 必修科目である「歴史総合」と選択科目である「日本史探究」「世界史探究」を同一年次で履修させてはいけませんか？

A 地理歴史科では、「地理総合」を履修した後に選択科目である「地理探究」を、「歴史総合」を履修した後に選択科目である「日本史探究」「世界史探究」を履修できることとしています。

高等学校学習指導要領総則第2款3(3)アにおいては、「必要がある場合には、各教科・科目の授業を特定の学期又は特定の期間に行うことができる」としています。

これらの各規定を踏まえると、学期の区分に応じて、履修の順序性を遵守し、「歴史総合」を履修した後で「日本史探究」「世界史探究」を同一年次に履修するといったことは可能ではありますが、こうした履修の順序性のある科目を、同一年次で履修させる場合には、学校として、前提となる科目の履修をしっかりと確認できるような仕組みや体制を整えることが求められます。このことは、「地理総合」と「地理探究」においても同様です。

「日本史探究」「世界史探究」の履修に際しては、「歴史総合」の履修の後に、生徒がその学習を踏まえて「日本史探究」「世界史探究」を自身の進路を見据えてしっかりと選択することができるよう、年度当初や年度途中における履修ガイダンスをしっかりと行うことが求められます。

Q 3 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善には、「見方・考え方」を働かせることが重要だと示されています。地理歴史科における「見方・考え方」とは何ですか？

A 今回の改訂において、全ての教科等において各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすもので、教科等の学習と社会をつなぐものとして「見方・考え方」が整理されました。そのうち、「社会的な見方や考え方」については、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法であると考えられます。

地理歴史科における「社会的な見方・考え方」は、各科目の特質に応じ、次のように整理されます。

【地理領域科目】

社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けて働かせるもの。

【歴史領域科目】

社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたりして働かせるもの。

なお、「見方・考え方」を働かせる際に着目する視点は、地理領域科目における位置や分布など、歴史領域科目における時期や年代など、多様にあることに留意することが必要です。各科目の学習における追究の過程においても、これらの視点を必要に応じて組み合わせ用いるようにすることも大切です。

Q 4 地理歴史については、新学習指導要領への移行期間中の教育課程の編成・実施に当たっては、新高等学校学習指導要領の領土に関する規定を適用することとされていますが、どのようにすればよいのでしょうか？

A 地理総合においては、我が国が当面する竹島や北方領土（歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島）の領土問題や経済水域の問題などを取り上げ、国境のもつ意義や領土問題が人々の生活に及ぼす影響などを考察できるようにすることが必要です。そのうえで、

○ 竹島や北方領土について、それぞれの位置と範囲を確認すること

○ 竹島や北方領土は、我が国の固有の領土であるが、それぞれ現在韓国とロシア連邦によって不法に占拠されているため、竹島については韓国に対して累次にわたり抗議を行っていること、北方領土についてはロシア連邦にその返還を求めていること

○ これらの領土問題における我が国の立場が歴史的にも国際法上も正当であることなどについての的確に扱い、我が国の領土・領域について理解を深めることも必要です。

尖閣諸島については、「我が国の固有の領土であり、領土問題は存在しないことも扱う」とあることから、現に我が国がこれを有効に支配しており、解決すべき領有権の問題は存在していないこと、我が国の立場が歴史的にも国際法上も正当であることを、その位置や範囲とともに理解することが必要です。

また、歴史総合においては、我が国の領土がロシアなどとの間で国際的に確定されたことを扱います。その際、北方領土（歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島）が一貫して我が国の領土として国境設定がなされたことについても触れるとともに、竹島、尖閣諸島については、我が国が国際法上正当な根拠に基づき正式に領土に編入した経緯にも触れ、これらの領土についての我が国の立場が歴史的にも国際法上も正当であることを理解できるようにすることが必要です。